

論文番号 25

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Behavioral Risk Factors Prevalence and Lifestyle Change After Stroke – A Prospective Study

脳卒中後の生活習慣危険因子の変化についての前向き研究

執筆者

Judith Redfern, MSc; Chris McKeivitt, PhD; Ruth Dundas, MSc; Anthony G. Rudd, FRCP; Charles D.A. Wolfe, FFPHM

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Stroke. 2000; 31:1877-1881

キーワード

lifestyle, risk factors, stroke prevention

要旨

(背景と目的) 脳卒中患者は脳卒中を再発する危険性が未発症者に比べて15倍以上増強している。そして危険因子を1つ以上の持つ脳卒中患者の場合は更に再発の危険性が増大する。先行研究において、脳卒中発症後の患者に対する生理学的な危険因子に対する管理(高血圧治療や抗血栓療法)は満足な効果は示さないことが示されている。しかし、脳卒中患者に対する行動としての危険因子(喫煙や飲酒習慣)の管理は有効であるという少数の報告がある。本研究の目的は、脳卒中中の再発を促進する行動としての危険因子を推定することと生活習慣の変化を明らかにすること(どの因子が再発の危険性を低下させるのか)である。

(方法) この研究には1995年から1998年に登録された南ロンドン脳卒中登録(地域ベースで行われている)のデータを用いた。主な調査項目には喫煙、飲酒習慣、肥満に関する項目が含まれている。これらの生活習慣の社会人口学的な違いを見るため、解析にはロジスティック型重回帰分析を用いた。

(結果) 脳卒中発症後1年で患者の22%がまだ喫煙しており、36%が肥満であった。また4%が大量飲酒者であった。

若い白人男性の患者のほとんどは喫煙者であり、大量飲酒者であった。女性と非白人の場合はほとんどが肥満者であった。病院や老人施設に入所している患者あるいは在宅介護を受けている患者と非白人の患者はそのほとんどが禁煙していたが、その他、生活習慣の変化と社会人口学的な特性との間に関連性はみられなかった。

(結論) 異なる行動上の危険因子は脳卒中患者の特定の社会人口学的な集団と関連していた。脳卒中発症後、ハイリスク集団に対しては脳卒中再発を予防する対策を継続して実施すべきである。しかしながら、脳卒中患者の社会人口学的特性と生活習慣の変化との関連性についてはいまだ明らかではなく、脳卒中患者の二次予防にとって最良の対策を見出すためには、生活習慣の変化の過程に注目した研究を更に実施する必要がある。